

研究課題	タテ持ち型編成を通じた教師力の向上と、21世紀型スキルの育成
副題	～みずから学び、みずから鍛え、みんなと生きる力の探究～
キーワード	タテ持ち型編成×複数担任制 SDGs×教科横断 PBL×コンピテンシー
学校/団体 名	大阪市立新巽学校
所在地	〒544-0015 大阪府大阪市生野区巽南4丁目2番53号
ホームページ	http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=j672488

1. 研究の背景

大阪市立新巽中学校（以下、本校という）は、「9カ年通じて、すべての生徒を全教員で見守る学校」を学校づくりの基盤として、荒れない学校づくりの仕組みについて実践を行ってきた。主には、兼務発令を行い「音楽・家庭科・保健体育」の小学校派遣、うち音楽と家庭科は評価まで実施することや、英語を週5時間、数学・技術家庭も授業数増加を図る教育課程の編成や、放課後学習会の実施など、「すべての生徒に」**学習権の保障**を行う仕組みづくりを推進した。また、「全教員で」という視点から、平成27年度から「一人担任制」を廃止し、誰もが担任という立場に関わることができるように「複数担任制」を導入した。そして平成30年度より複数人で構成される教科のすべてを「タテ持ち型」で編成し、教科指導において全教員が、3年間のカリキュラムを系統立て、生活指導等の課題も共有しながらすべての生徒に関わる仕組みを構築していくことを計画した。

本校の生徒の特徴は、授業や行事、また部活動等の活動において見本や例を求め、型通りにこなすことが最優先となり、自分で何かを生み出す力や、自らの考えを表現する力、学びをつなげる習慣が身についていない。21世紀をたくましく生きていくためのスキルの向上を図ることも必要であった。そこで、**21世紀スキルの向上**を図るために**PBL型**の学習実践を推進することを計画した。課題解決や協働的な取り組みの際に手段として有効なICT機器を、大阪市は平成27年度に普通教室にプロジェクター・ノートパソコンを整備し、タブレットは40台支給された。本校でも独自に、まなボードを40枚と、普通教室すべてにプロジェクターとはりつけ型のスクリーンを整備した。しかし、本校のWi-Fi整備は平成30年度予定であり、まだまだ日常的に活用しづらい状態であった。教科書やノートといったアナログ教材とデジタルをシームレスにつなぎ、課題解決や協働の場面で「手軽に活用」でき、「準備の煩わしさ」が解消される環境整備をすることが取り組みを推進するために必要な手立てとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前述の通り「すべての生徒を全教員で見守る学校」を創ることである。しかし、それを達成するためには、「学年セクト」や「個人経営」といった学校にある根本的な課題が見えない大きな壁としてそびえ立っていた。自分の学年しか見ない環境では、役職にでもついていない限り、他学年のことまで考えることはない。また、自分の授業だけの運営であれば、他の教師と連携して授業づくりをしようという考えに至ることはない。現在の学校の一般的な仕組みは、自分の範囲外の問題に対しては対応する責任がないため全体に対して無関心になりがち

な風潮をつくりだしている。

さらに、若手教員の育成はどの自治体も必要に迫られる課題だが、「担任だから」若手教員でも重大な事案に矢面に立って対応し、「授業担当者だから」若手教員でも自分の授業にすべての責任を負うことは決して珍しい話ではない。このような風潮から、授業や学級での生徒のトラブルは、生徒のトラブル解決が目的にも関わらず、教員の成長の糧にすることが優先されてしまい、生徒や保護者が犠牲となってしまうケースが多い。これらの状況を踏まえると、**教師力の育成の際に生徒や保護者が犠牲とならない仕組みを最優先に整えることが重要**である。本校の研究の目的は2つある。一つは、生徒や保護者に負担を強いることなく、また、教師の個人の力量に左右されることなく、本校の学校経営の中で必然的に生徒理解や教科指導が磨かれる仕組みをつくること。もう一つは、全教員が学級や学年といった小集団にだけ目を向けるのではなく、学校全体を総合的に包括した視点で教育活動ができる集団育成の仕組みをつくることである。

3. 研究の経過

研究は教員の協働を促すために、またよりよい社会を形成する人材育成を図り、一斉画一的な授業から脱却を図るために、主に3つの柱で取り組みを構成した。

<SDGs×教科横断>

一つ目は教科内と教科間の壁を撤廃することである。教科横断的な視点を持ちやすくするために、SDGsを教科をつなぐキーワードとして学校全体で推進した。

<PBL×コンピテンシー>

「調べ、まとめ、発信する」情報活用能力の育成のために総合的な学習の時間を基盤としてPBL型学習を全学年で実践した。2年生は「しんたつ、みらいプロジェクト」と題し、「**職業**の魅力ってなんだろう？」という問いから仕事について探究し、目的意識と他者意識を持って学んだことを発信した。PBL型の学習で生徒、教師の双方向にとってどんな力が身についたのかを図るものさしが必要になったので、21世紀スキルを基盤とした本校の10のコンピテンシーをつくった。

<タテ持ち型編成×複数担任制>

教師の協働を促す一手として、「**同じ課題を共有する**」ことが必要であった。なぜなら共通の課題がないもの同士は、同等の責任感を持って課題解決に向けた協働ができないからである。企業の多くは共通の課題を持つことは当たり前である。しかし学校現場は「一人担任制」や「一人で自分の学年の生徒のみ授業をする」といった環境が形骸化されており、それぞれの教員が自分の責任下における生徒のみを受け持つという形が当たり前となっている。タテ持ちにすることで、学力調査の結果や全校生徒の学習到達度という共通の課題を共有することができた。また、複数担任のため、学級の課題を複数で共有することで多面的な視点で生徒理解に努めることができた。

開催日	内容
5 月 2 5 日	SDGs カードゲーム講習会（イマココラボ）＊教員対象
6 月 2 日	SDGs に取り組む企業の講話（homedoor、双日）＊アンケート
6 月 7 日	5 教科合同教科会
6 月 2 2 日	公開授業、研究協議（大阪市 OJT 事業）
6 月 2 8 日	第 2 回学力向上委員会（福井県視察報告、ICT 研修）
7 月 1 0 日	ICT 研修（書画カメラ）
1 0 月 2 5 日	コンピテンシー・情報活用能力研修（NHK for School）
1 1 月 2 日	SDGs カードゲーム講習会（笑下村塾）＊教員・保護者・生徒対象
1 1 月 2 2 日	公開授業、研究協議（田村知子教授来校）＊アンケート
1 1 月 2 9 日	公開授業、研究協議（小中連携）
2 月 2 2 日	公開授業、学習発表会、講話（志水宏吉教授来校）＊アンケート

4. 代表的な実践

まなボードや書画カメラの導入後、全教科でこれらを活用した授業づくりを進めた。協働的な学習の場面もたくさん出てきたが、協働することが手段となっているという課題も生まれた。目的を達成するために協働が必要なのであれば、協働することは手段に過ぎない。協働することが目的となっている授業の多くは、主体的で深い学びまでたどり着くことができなかった。そこで＜表 1＞のコンピテンシーを作成し、生徒たちが協働的な場面で＜表 1＞の力が育まれているかという視点を持って学習評価をすることにした。これは生徒、教師双方向にとって学習が高まっているかを図るものさしとして活用することができた。このような視点を持って PBL 型学習・教科の授業も推進した。

＜表 1＞※PBL 型学習を中心として本校で育成したいコンピテンシー

1. 内発的動機	→	取り組んでみようとする意識の源
2. 自己管理力	→	客観的に見つめ、自身の感情をコントロールする力
3. 自己有用感	→	自分の価値を知り自信に変える
4. 持続的探究	→	粘り強く、追い求める芯の強さ
5. 問題解決力	→	道筋を立てて、物事に取り組む力
6. 批判的思考	→	物事を冷静に見つめ、判断する考え
7. 社会的責任	→	集団の中で自分が出来る振る舞いや貢献
8. 合意形成力	→	納得しながら気持ちをすり合わせる力
9. 多樣的受容	→	考えや価値観などの違いを受け入れる広さ
10. 情報活用力	→	情報を選び、活かし、正しく発信する力

ここからは先述した 3 つの柱にそった実践のうち、2 つ示すこととする。

<SDGs×教科横断>

まなボード・書画カメラの効果的な活用事例

まなボードはブレインストーミング等で出てきた情報を思考ツールを用いて整理するときに活用した。比較し、多様性や共通性を見出すことや、理由づけをし根拠を明確にする活動などに効果があった。特に情報活用能力の育成で、意識的に活用するとよいことがわかった。また、書画カメラは自分のノートや教科書といったアナログ媒体を投影することで、デジタルにシームレスに接続することができた。教員が自分の手元を投影するだけでなく、生徒が自身の考えや思いを発信する時のツールとしての活用場面も増えた。黒板に書く「煩わしさ」が解消され、手軽に投影できることで、時間短縮はもちろん、説明に関する不安や負担も軽減することにつながった。



<まなボードを書画カメラで投影>

<PBL×コンピテンシー>

「調べ、まとめ、発信する」学習の基盤として、そして 21 世紀スキルの育成として<表 3>の計画に基づき、2 年生は<表 4>の実践を行った。

<表 3> 2 年 PBL 型学習 年間計画 (学びの道しるべ)		
5 月 9 日	プロローグ:「しんたつ、みらいプロジェクトの開幕」	
5 月 17 日	第 1 節:「びゅーてい大使の次なる使命、になりたい仕事はなんだろう？」	
6 月 1・2 日	第 2 節:「自分たちではなかなか会うことのできない人の話を聞こう」 *職業講話	
6 月	第 3 節:「自分がやりたい仕事について考えよう①」	
7 月 5・6 日	第 4 節:「実際に体験しに行こう」 *職場体験学習	
7 月	第 5 節:「感謝の気持ちと学んだ成果を送ろう」 *職体事後学習	
11 月 2 日	第 6 節:「仕事のびゅーていを『むーびい』で伝えよう」 *文化発表会	
9~10 月	第 7 節:「自分がやりたい仕事について考えよう②」	
11 月	第 8 節:「大阪万博誘致の結果を知ろう」	
12~1 月	第 9 節:「実際に訪問しよう」 *企業訪問	
1 月	第 10 節:「プレゼンを完成させよう」	
2 月	第 11 節「プレ・プレ」 *学年発表会	
2 月 16 日	第 12 節:「やりたい仕事とその未来」 *研究発表会	
	エピローグ:「活動を通じて学んだこと」	

<表 4>

活動の様子	活動内容
	<p><福井大学義務教育学校ラウンドテーブル（6月）></p> <p>探究を進めるものの、なかなかうまくいかない時期があった。福井大学義務教育学校の2年生も「職業」をテーマに探究をしていたので、FaceTime で交流を持つことにした。学び方や探究方法など、自分たちだけでは気付くことのできなかった学びを得ることができた。</p>
	<p><職場体験学習後の学習報告会（7月）></p> <p>23の事業所で職場体験を実施した。文化発表会で仕事の魅力を発信するというミッションを持って体験した。似た業種で6つのチームを編成し、ポスターセッション形式で情報共有を行った。</p>
	<p><全員での合意形成（10月）></p> <p>文化発表会での発表内容を6つのチームに分かれて運営していたが、一週間前になってもうまくまとまらなかった。3人の生徒がこれまでのストーリーを一新して再提案した。全員で対案を確認し、合意形成を図ることができた。</p>
	<p><他者意識を持った発信（11月）></p> <p>職場体験でお世話になった方々に、体験を通じて学んだ仕事の今や魅力を発信すると約束をしていた。AI やドローンといったテクノロジーが今後自分たちの働き方をどう変えるのか、また、いつの時代になっても変わらない人とのつながりなどについて発信することができた。</p>
	<p><企業訪問（1月）></p> <p>仕事の魅力を探究していく中で、生徒たちも SDGs に会うことになった。そこで SDGs に取り組む大阪市の企業に訪問し、どのように世界に貢献しているのかを学びにいった。読売新聞、クボタ、住友製薬など17の企業に訪問し、よきロールモデルと出会うことができた。</p>
	<p><#しんたつばんぱく（2月）></p> <p>「100人のリスナーにSDGsを発信する」を目的に大阪万博とかけた学習発表会を実施した。プレゼン・アート・アクティビティ・モニュメントなど計14ブースに分かれて発信を行った。1年・3年の学習の様子も合わせて学校全体で発信することができた。</p>

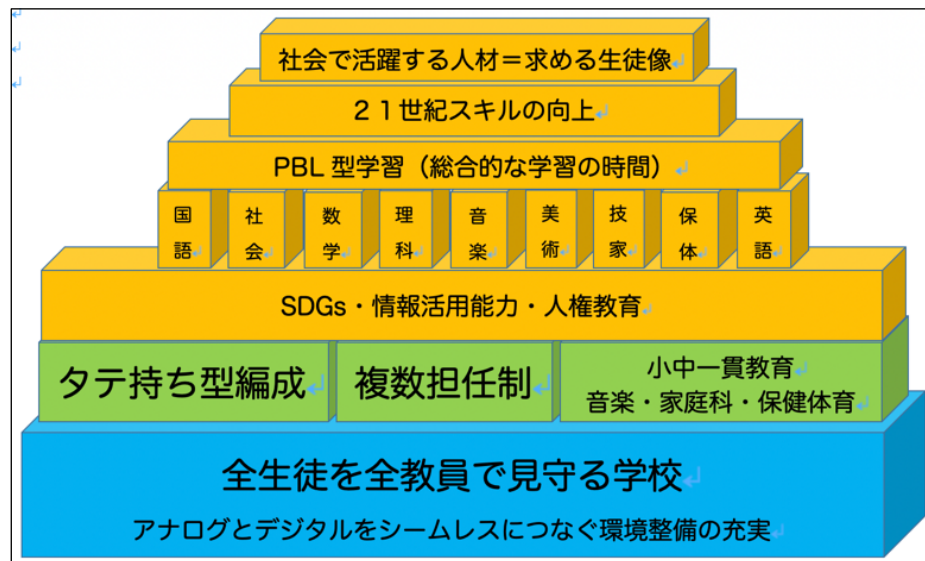
5. 研究の成果

＜タテ持ち型編成×複数担任制＞

～教師の変容～

複数担任制に加え、タテ持ち型の編成を行うことで教員の行動に変容が見られた。教科間での打ち合わせが増えたということである。お互いがどんな授業をしているのか、どんな教材を使っているのか、学級ごとの得点力を比較し、お互いに成長させることができているのかなどを考えざるを得ない環境が生まれた。これらの流れが相乗効果を生み、体育大会もタテ割りで運用したり、学年の垣根を越えた取り組みが始まった。＜表 5＞のような関連性を意識した育成を進めることにつながった。

＜表 5＞



～生徒の変容～

大きなことを成すためにはどこの世界も協働が必要で、その中で「みんな違ってみんないい」の多様性を受容する視点を育むことや、「だからこそ対立は起こるものだ」と理解し受け入れた上で、人との関わりの中で起こる感情の起伏をコントロールする力を育むことができた。＜表 6＞に示すように、自己有用感や多様性受容の気持ちを高めることができた。

＜表 6＞ 生徒アンケート結果		2 年	
項 目		H 2 9	H 3 0
1	学校へ行くのが楽しい	58.3	70.8
2	体育大会や文化発表会などの学校行事に取り組んでいる	60.6	84.7
3	授業や先生の話で将来の進路や生き方について考えたことがある	45.1	59.7
4	先生は I C T 機器などを使って、授業内容や方法を工夫している	74.3	81.9
5	人権の大切さについて学ぶ機会が多い	56.9	68.1
6	授業で自分の考えをまとめたり、発表したりすることがある	51.4	63.9
7	友だちの気持ちを考え、友だちを大切にしている	79.2	91.7

6. 今後の課題・展望

全教員が協働的な学習や課題提示型の授業実践のスキルを向上させることができた。しかしながら以下のような課題も生まれてきた。

- ・ PBL 型の学習を初めて全体で実施したため、時間の調整や生徒たちの進度が予測できず、放課後の時間や朝の時間を圧迫することとなった。
- ・ 協働することが目的となる授業実践があった。
- ・ 登校できる生徒ばかりが対象となり、不登校や支援を要する生徒に対しての手立てについて検討することができなかった。

上記の課題に対して、次年度以降は3つの視点で展開していくことを計画する。

- 1) 定期テストを廃止し、単元テストとする。
- 2) PBL 型の授業実践を洗練させ、もっと学校行事とリンクさせた取り組みとすることで、シームレスな行事のつながりを構築する。
- 3) 生徒のメタ認知力を向上させる仕組みを構築する。

7. おわりに

最後になぜこのような研究をやろうと思ったのか、少しだけ本音を補足をしたい。世界は今、グローバル化と情報通信技術の発達により、多様な文化や価値観が距離という垣根を越えて飛び交っている。また超高齢化の波も押し寄せ、そう遠くない未来に **Society 5.0** の生活を求めなければ、社会・経済・環境のバランスを保つことができない時代が到来するだろう。さらに、紛争や差別、宗教や貧困の問題、食品ロスや環境問題、ジェンダー、マイノリティ、エネルギー、災害問題といった様々な課題も解決し、持続可能な社会を形成することも求められている。行き先不透明な未来を切り開く「解決」と「創造」の力を持った次世代の担い手を育成することが学校に課せられた命題であると言えるだろう。ゆえに、学校はより多くの情報や変化を受容しながら、学校本来の目的である「未来の社会で活躍できる人材の育成」に焦点をあて、一斉画一的で形骸化した学習形態からの脱却を図ることに向き合わなければならない。

そのような局面を迎えているにも関わらず、学校は前年度踏襲を繰り返し、過去の成功体験から導かれる学習方法や指導方法にばかり着目してはいないだろうか。経験則にのみ価値づけし、根拠を明確にすることや言語化するといった改善を進めてきただろうか。前述したとおり、子供たちが生きていく未来に必要な力は、我々大人が経験した過去だけで教授できるものではない。とすれば、学校の当たり前や常識を疑うことが大切であって、行なっている教育活動が時代に左右されない普遍的なものなのか、それとも目的を見失った慣例的なものなのかを見極めながら、整理していくことが必要だと考えたのである。

今回、初めて1年間を通じてプロジェクト型学習の実践を行った。生徒も教師も戸惑う面が多くあったものの、一斉画一的な学習でない「協働的な学び」につながったと感じている。また、教師も生徒たちを導くためにファシリテーションという視点と向き合うことができた。タテ持ちと複数担任制をしくことによって教師は協働せざるを得ない環境の中に身を置くこととなったが、実に素敵な協働の姿を見せてくれた。協働を学ぶ学校にするためには、今、教師たちも協働

的に働く仕組みの中に身を置き、自己研鑽をし、集団として磨きあうことが必要ではないだろうか。働き方改革やブラック学校といった課題も多いが、一枚岩となり、社会の「未来」と「今」を感じることができる学校づくりを、生徒、保護者、地域、企業、教員、委員会とパートナーシップを大切にしながら創りあげていきたい。これからの時代を背負う生徒のため、ひいては彼らを育てるこれからの教員のためにも継続して研究を進めていきたい。

大阪教育大学の田村知子先生をはじめ、大阪大学の志水宏吉先生、本校にご来校いただきご指導いただいたこと、パナソニック教育財団の皆様にこのような貴重な機会を与えてくださったことに感謝の意を申し上げ、結びとしたい。

8. 参考文献

- ・ 国立大学法人福井大学教育学部附属義務教育学校平成（2018）『自律的な学びへのイノベーション探究するコミュニティを培う』（2-15）
- ・ 工藤勇一（2018）『学校の「当たり前」をやめた』時事通信社